

追悼

大澤先生の悲願

— 廣池千九郎博士とモラロジーを世界の学界に位置付ける —

諏訪内 敬司

大澤先生に初めてお目にかかったのは、大学卒業後社会経験を経て教員免許取得のため大学に学士入学した一年目でした。長期休暇を利用して、本部の論文講座を受講した時です。大学での指導教授が「教師ソクラテスの研究」によって博士の学位を取得された先生でしたので、卒業論文のテーマをソクラテスにしようと考えてました。モラロジーではソクラテスを聖人の一人に位置付け、理論の一角を支えていると教えられていたので、卒論でソクラテスをどう位置付けたいのかを伺うために、研究部長をされていた先生に個人相談を申し込んだのです。この時、指導教授からソクラテスをしっかり学ぶようにとのアドバイスを戴きました。

177

「教育」ということを根源から考え直すという指導教授の導きを受けて、ソクラテスに始まりコメニウス、ルソー、ペスタロッチ、テューイなど教育思想の巨人に取り組み、学問の面白さに引かれて大学院に進むことになりました。大学院時代にも長期休暇には講座を受講してモラロジーの勉強を続けつつ、修士論文でもソクラテスを扱うことになり、難解なプラトンの著作と格闘してどうにか修士論文を書き上げることができ

ました。

幸い博士課程に進むことができたその年、ロンドン大学に留学する機会に恵まれました。偶然にも現理事長と北川治男教授のイギリス留学の時期と重なり、滞英中は両先生に大変お世話になりました。モラロジー研究所の顧問をされていたロンドン大学のJ・A・ラワリーズ名誉教授宅に私も時々お招きを受けるという光栄に浴しました。翌年の春、廣池千太郎前所長先生、国立教育研究所元所長の平塚益徳先生と共に、大澤先生もブルガリアのソフィアで開かれたユネスコの会議に出席の後、ロンドンに立ち寄られましたので、勉学の状況などを報告致しました。ロンドン大学アジア・アフリカ語学院(SOAS)図書館をご案内したところ、大澤先生は『廣池博士全集』が収納されているのを確認されて大変お喜びでした。

昭和五十五年(一九八〇)私がモラロジー研究所研究部に奉職した時、職員になる心構えを得るために講座を受講するとき、積極的に色々な役を進んでやるようにと注意を賜りました。

その年の七月に、世界比較教育学会(平塚益徳会長)の大会が日本で開催されるにつき、その準備の応援をするようにと先生から指示を賜りました。当時東京の目黒区にあった国立教育研究所(現在の国立教育政策研究所)に大会の事務局が置かれていました。平塚会長は千太郎先生の九州大学時代の恩師であり、モラロジー研究所の顧問をされていた関係で、研究所が積極的に協力することになったのだと思います。千葉県柏市から目黒区まで片道三時間近くかかるので毎日通うのは大変であり、国研に徒歩で行ける所にたまたま知り合いの家があったので、そこに下宿して応援に行くことを特別に認めて戴きました。また財政面の配慮もして戴きました。

応援は私の他に、学生アルバイトも何人かいました。当時はワープロもパソコンもなく、全て手作業によ

る人海戦術に頼っていました。コピー機さえ連続して使うとオーバーヒートしてしまうほどでした。将来、モラロジが世界を相手に国際学会を開く時に役に立つ、という長期的展望を視野に入れての応援でした。その機会は意外に早く訪れ、昭和六十二年（一九八七）の道德教育国際会議を初めとしたモラロジ研究所主催の一連の国際会議に役立ちました。

大会当日は、会場の国立婦人教育会館（埼玉県嵐山町）に泊まり込んでの臨戦態勢でした。大会は海外三十一国から二百四十人、国内から百六十二人の合計四百二人が参加し、大成功でした。

ところが、平塚先生は翌年春急逝されました。学者としてだけではなく、国立教育研究所長として、文部省の中央教育審議会委員をはじめとした各種委員会の委員として日本の教育界に絶大な影響を与えられただけではなく、ユネスコの関係者として世界の教育界をもリードされてきた平塚先生の顕彰事業をすることに、千太郎先生がその実行委員長に就任されました。五月の連休明けに事務局をモラロジ研究所に置くことになり、私が事務局をお世話するよう、大澤先生からご指示がありました。何をどうすればいいか皆目見当もつきませんでした。委員である九州大学や国立教育研究所関係の諸先生をお迎えして、とに角遺漏のないように、会議の裏方、毎月の小会議、年に数回の全体会議、追憶集、著作集、講演集の編集出版、会報の出版、懇ぶ会の開催、出版記念会の開催、編集委員慰労の台湾旅行等を、先生のご指導ご鞭撻を戴きながら、事務局長の野辺忠郎先生（元明治大学教授、元麗澤瑞浪中学高等学校長）の補佐役として八年間に互って何とかこなすことができました。

この仕事で私が過労でダウンしたとき、特別の配慮を賜って温泉治療に専念させて戴きました。その際、大澤先生が内田智雄先生と共に『生誕百年廣池博士記念論集』の編集出版を担当して、その完成慰労会の翌

朝から座骨神経痛で大変苦しんだ話を伺い、励まして戴きました。

大澤先生はモラロジーを理論的に深く研究されていただけではなく、実践にも精魂を傾けておられました。千太郎先生を大変深く尊崇し、千太郎先生の恩師に対する報恩としての奉仕を衷心から支えられており、先生の精神伝統にお仕えする姿を身近に垣間見ることができました。このように先生はモラロジーの教えの実践に全身全霊を傾けておられ、大変に勉強になりました。

大澤先生の講義講演ふりは理路整然とされていることで有名です。千太郎先生亡き後のある年、平塚会の新年会でそれぞれの現状報告をする機会がありました。大澤先生は突然指名されても全く動じることなく、研究所の現状、課題、展望を短時間に非常に手際よくまとめ話されました。大学での講義や学会発表になれているはずの委員の先生方も、大澤先生の余りに完璧な話しっぷりに、「後の者がやりにくい」と漏らされたほどでした。

大澤先生の著書『青年教師 廣池千九郎』を読んで、廣池博士が青年教師時代に「貧児教育の父」として世界から崇められているベスタロッチに傾倒していたことを知り、廣池博士の教育に賭ける思いを知ることができました。

ご多忙の中、月に一回夜間にご自宅を開放された廣池博士の著作を学ぶ研究会に、私も参加させていただけました。江戸時代の私塾ではこのように師を慕って取り囲み、勉学に邁進したのではないかと想像しながらの、感慨深い研究会でした。研究部での研究会では、「モラロジーをただ客観的に研究するのではなく共感的理解が必要であるが、しかし研究部といえども御用学問になつてはいけない」と、確信する必要性と学問の厳しさの両面を持つようと我々研究学徒に求められたことを思い出します。

私自身の専任先変更については、大変ご心配をおかけしてしまったことが心残りです。その際、論文を数多く書くようにとご指導いただきながら未だ果たし得ず、忸怩たる思いです。

大澤先生は廣池博士の法学者としての位置付けに奔走され、多くの協力を得て実績を残されました。地方への出講や園内の重責を担う傍ら、モラロジを外部の学者に評価してもらおうと、学界の先生方とも機会あるごとに接触しておられました。さらに大澤先生は、廣池博士と、実践と理論とが渾然一体となった独特の学問であるモラロジを日本国内はおろか世界の学界に位置付け、評価されることを念願しておられたと思います。この悲願を実現することが残された者に課された最大の責務であると同時に大澤先生の慰霊になると確信して、微力を尽くしたいと決意致しております。